

12.4 [月]

第16回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール／19時30分開演(19時から解説)
Yomikyo Ensemble Series, No. 16
Monday, 4th December, 19:30 (Pre-concert talks from 19:00) / Yomiuri Otemachi Hall

※出演者と曲目のみ掲載しています。曲目解説は当日別紙を配布予定です。

《小森谷巧率いる精鋭の豊潤なブラームス》

ヴァイオリン／小森谷巧 (読響コンサートマスター)、小杉芳之

Violin TAKUMI KOMORIYA (YNSO Concertmaster), YOSHIYUKI KOSUGI

ヴィオラ／柳瀬省太 (ソロ・ヴィオラ)、森口恭子

Viola SHOTA YANASE (Solo Viola), KYOKO MORIGUCHI

チェロ／遠藤真理 (ソロ・チェロ)、渡部玄一

Cello MARI ENDO (Solo Cello), GENICHI WATANABE

ピアノ／須関裕子

Piano HIROKO SUSEKI

ナビゲーター／鈴木美潮 (読売新聞東京本社 社長直属教育ネットワーク事務局専門委員)

Navigator MISHIO SUZUKI

ブラームス スケルツォ (F. A. E. ソナタ) [約5分]

BRAHMS / Scherzo (F. A. E. Sonata)

ブラームス ピアノ三重奏曲 第2番 ハ長調 作品87 [約30分]

BRAHMS / Piano Trio No. 2 in C major, op. 87

- I. Allegro
- II. Andante con moto
- III. Scherzo : Presto
- IV. Finale : Allegro giocoso

[休憩 Intermission]

ブラームス 弦楽六重奏曲 第2番 ト長調 作品36 [約40分]

BRAHMS / String Sextet No. 2 in G major, op. 36

- I. Allegro non troppo
- II. Scherzo : Allegro non troppo – Trio : Presto giocoso
- III. Poco adagio
- IV. Poco allegro

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

12.12 [火]

第573回 定期演奏会
サントリーホール／19時開演
Subscription Concert, No. 573
Tuesday, 12th December, 19:00 / Suntory Hall

指揮／コルネリウス・マイスター (首席客演指揮者)

Principal Guest Conductor CORNELIUS MEISTER P. 6

メゾ・ソプラノ／藤村実穂子 Mezzo-Soprano MIHOKO FUJIMURA P. 8

女声合唱／新国立劇場合唱団

Women's Chorus NEW NATIONAL THEATRE CHORUS P. 11

児童合唱／TOKYO FM 少年合唱団、フレーベル少年合唱団

Children's Chorus TOKYO FM BOYS CHOIR, FROEBEL BOY'S CHORUS P. 8

合唱指揮／三澤洋史 Chorusmaster HIROFUMI MISAWA P. 11

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

マーラー 交響曲 第3番 ニ短調 [約100分] P. 12

MAHLER / Symphony No. 3 in D minor

- I. Kräftig. Entschieden
- II. Tempo di Menuetto. Sehr mäßig. Ja nicht eilen!
- III. Comodo. Scherzando. Ohne Hast.
- IV. Sehr langsam. Misterioso. Durchaus *ppp*.
- V. Lustig im Tempo und keck im Ausdruck
- VI. Langsam. Ruhevoll. Empfunden.

※本公演には休憩がありません。あらかじめご了承ください。

*No intermission

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)
[協力] **アフラック**



※本公演では日本テレビ「読響シンフォニックライブ」の収録が行われます。

12.17 [日]	第202回 日曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Sunday Matinée Series, No. 202 Sunday, 17th December, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre
20 [水]	第607回 名曲シリーズ サントリーホール／19時開演 Popular Series, No. 607 Wednesday, 20th December, 19:00 / Suntory Hall
21 [木]	第18回 大阪定期演奏会 フェスティバルホール／19時開演 Subscription Concert in Osaka, No. 18 Thursday, 21st December, 19:00 / Festival Hall
23 [土・祝]	第202回 土曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Saturday Matinée Series, No. 202 Saturday, 23rd December, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre
24 [日]	第99回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ 横浜みなとみらいホール／14時開演 Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series, No. 99 Sunday, 24th December, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall

※19日は次ページをご覧ください。

指揮／エマニュエル・クリヴィス Conductor EMMANUEL KRIVINE P.7

※出演アーティストは次ページをご参照ください。

ベートーヴェン 交響曲 第9番
ニ短調 作品125 〈合唱付き〉 [約65分] P.16

BEETHOVEN / Symphony No. 9 in D minor, op. 125 “Choral”

※詳細は次ページをご参照ください。

※本公演には休憩がございません。あらかじめご了承ください。

*No intermission

【主催】 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
【協賛】 新菱冷熱工業株式会社 (12/17、21)、非破壊検査株式会社 (12/21)、
大和ハウス工業株式会社 (12/21)、NTTコミュニケーションズ株式会社 (12/23)
【助成】 文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業) (12/17、20、23、24)
【事業提携】 東京芸術劇場 (12/17、23)
【協力】 コジマ・コンサートマネジメント (12/21)、横浜みなとみらいホール (12/24)
【マネジメント】 キョードー (12/21)



12.19 [火]	FUJITSU Presents Concert 〈第九〉特別演奏会 サントリーホール／19時開演 Special Concert, presented by FUJITSU Ltd Tuesday, 19th December, 19:00 / Suntory Hall
-----------	---

指揮／エマニュエル・クリヴィス Conductor EMMANUEL KRIVINE P.7

ソプラノ／インガー・ダム＝イェンセン Soprano INGER DAM-JENSEN P.9

メゾ・ソプラノ／清水華澄 Mezzo-Soprano KASUMI SHIMIZU P.9

テノール／ドミニク・ヴォルティヒ Tenor DOMINIK WORTIG P.10

バス／妻屋秀和 Bass HIDEKAZU TSUMAYA P.10

合唱／新国立劇場合唱団 Chorus NEW NATIONAL THEATRE CHORUS P.11

合唱指揮／三澤洋史 Chorusmaster HIROFUMI MISAWA P.11

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

〔第1部〕〈オルガン・ソロ〉
オルガン／大塚直哉 Organ NAOYA OTSUKA P.11

J. S. バッハ コラール〈目覚めよ、と呼ぶ声あり〉 BWV645 [約5分] P.19
J. S. BACH / Chorale “Wachet auf, ruft uns die Stimme” BWV645

J. S. バッハ 幻想曲 ト長調 BWV572 [約9分] P.19
J. S. BACH / Fantasia G major, BWV572

〔休憩 Intermission〕

〔第2部〕〈第九〉
ベートーヴェン 交響曲 第9番
ニ短調 作品125 〈合唱付き〉 [約65分] P.16

BEETHOVEN / Symphony No. 9 in D minor, op. 125 “Choral”

- I. Allegro ma non troppo, un poco maestoso
- II. Molto vivace
- III. Adagio molto e cantabile
- IV. Presto – Allegro assai

【主催】 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
【協賛】 富士通株式会社

※本公演では日本テレビ「読響シンフォニックライブ」の収録が行われます。

コルネリウス・マイスター

(首席客演指揮者)
Cornelius Meister

新世代の読響の“顔”
マーラーに挑む

9月公演のベートーヴェン〈田園〉で、読響の首席客演指揮者に正式デビューした俊英が、早くも再来日。今回はマーラーの独唱・合唱付き大作、交響曲第3番に挑む。本場ドイツ・オーストリアで培った経験とみずみずしい才気で、若い力にあふれるマーラーを聴かせてくれるだろう。

1980年ドイツ・ハノーファー生まれ。ハノーファー音楽大学でピアノと指揮を学び、21歳でハンブルク歌劇場にデビューを果たした。2005年に24歳の若さでハイデルベルク市立劇場の音楽総監督に就任し、12年までその職にあった。10年からウィーン放送響の首席指揮者兼芸術監督を務めている。ウィーンのみならず、ヨーロッパ各地のコンサートをはじめ、日本を含む世界各地へのツアーやレコーディングなど、その積極的な活動は高く



©読響

評価されている。読響とは14年に初共演し、R. シュトラウス〈アルプス交響曲〉でスケールの大きな演奏を聴かせた。

これまでにロイヤル・コンサートヘボウ管、バイエルン放送響、パリ管などに客演しているほか、オペラではウィーン国立歌劇場、ドレスデン国立歌劇場、ミラノ・スカラ座、英国ロイヤル・オペラなどに登場。日本では06年に新国立劇場で〈フィデリオ〉を指揮している。18年からカンブルランの後任として、ドイツのシュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督に就任する。

◇12月12日 定期演奏会

エマニュエル・クリヴィヌ

Emmanuel Krivine

フランスの名匠が振る
注目の〈第九〉

年末恒例の〈第九〉を指揮するのは、2003年以来、14年ぶりに読響に客演するフランスの世界的名匠。モダンとピリオド、両方の奏法に早くから精通し、その鮮烈な響きで高い評価を得てきた。当然、今回の〈第九〉でも聴き手の惰性を打ち破る、さまざまな仕掛けが用意されることだろう。注目の公演だ。

1947年フランス・グルノーブル生まれ。パリ国立高等音楽院でヴァイオリンを学び、後にシェリングやメニューインにも師事。初めはヴァイオリニストとしてキャリアをスタートさせたが、指揮への関心を高め、76年から83年までフランス放送フィルの首席客演指揮者を務め、その間にヴァイオリンから指揮に活動の比重を移した。81年から83年までロレーヌ国立管音楽監督、83年から名門リヨン国立管の首席客演指揮者となり、



©Fabrice Dell'Anese

87年には音楽監督に就任。指揮者としての名声を確立した。

これまでにベルリン・フィル、ロイヤル・コンサートヘボウ管、ロンドン響、ボストン響、シカゴ響など世界の一流オーケストラに客演。そのかわり、2004年にピリオド楽器によるオーケストラ「ラ・シャンブル・フィラルモニック」を創設。ベートーヴェンの交響曲全集の録音（ナイーブ）は大きな話題となった。06年から15年までルクセンブルク・フィルの音楽監督を務め、17年9月からフランス国立管音楽監督に就任した。

◇12月17-24日〈第九〉公演



©Edd Royal

メゾ・ソプラノ 藤村実穂子

Mezzo-Soprano Mihoko Fujimura

東京芸術大学音楽学部声楽科卒業、同大学院修了、ミュンヘン音楽大学大学院修了。2002年、主役級としては日本人で初めてバイロイト音楽祭にデビュー、以来9年連続出演。ミラノ・スカラ座、ウィーン国立歌劇場、ロイヤルオペラハウス・ロンドン、ミュンヘン国立歌劇場、ウィーン・フィル、ロンドン・フィル、ロイヤル・コンサートヘボウなどに出演。ティーレマン、アバド、メータ、エッシェンバッハなどの各氏とも共演。出光音楽賞、芸術選奨新人賞、エクソンモービル音楽賞、サントリー音楽賞、紫綬褒章の各賞を受賞。

◇12月12日 定期演奏会

児童合唱

TOKYO FM 少年合唱団

Children's Chorus TOKYO FM Boys Choir

1985年設立。ボーイソプラノの響きを追求し、小学生の男の子のみをメンバーとする世界でも希少な少年合唱団。年2回の主催公演の他、新国立劇場、東京二期会、フェニーチェ歌劇場、トリノ王立歌劇場、パレルモ・マッシモ劇場、メトロポリタン・オペラ、ロイヤル・コンサートヘボウ管など国内外の一流歌劇場やオーケストラの公演に数多く出演。一方で様々な音楽家のCD録音やCM・ドラマの歌唱録音に参加するなど、その活動は多岐にわたる。(株)エフエム東京 主宰。

児童合唱

フレーベル 少年合唱団

Children's Chorus Froebel Boy's Chorus

1959年、児童書・絵本の出版で知られるフレーベル館の文化事業の一環として結成された。合唱指揮者として知られた磯部俣の指導の下、コンサートやテレビ出演などで評価を高め、TOKYO FM少年合唱団と並ぶ日本を代表する児童少年合唱団としての地位を確立した。児童合唱曲を中心に、童謡から歌謡曲まで幅広いレパートリーを誇る。定期演奏会のほか、オーケストラ公演や映画やCMなどの各種録音にも積極的に参加している。

◇12月12日 定期演奏会



©Isak Hoffmeyer

ソプラノ インガー・ダム=イェンセン

Soprano Inger Dam-Jensen

デンマーク出身のソプラノ。93年に新人の登竜門として知られる英国・BBCカーディフ国際声楽コンクールで1位となり、以来、オペラとコンサートの両方で活躍している。オペラでは母国のデンマーク王立歌劇場を中心に、パリ・オペラ座や英国ロイヤル・オペラ・ハウスなどに出演。コンサートでは、マーラーやR. シュトラウスなどを得意とし、ドホナーニ、コリン・デイヴィス、ブロムシュエットといった巨匠の下、ニューヨーク・フィル、フィルハーモニア管、BBCフィル、ベルリン・ドイツ響などと共演している。

◇12月17-24日〈第九〉公演



©Takehiko Matsumoto

メゾ・ソプラノ 清水華澄

Mezzo-Soprano Kasumi Shimizu

静岡県出身。国立音楽大学、同大学院とも首席で修了。新国立劇場オペラ研修所を経て渡伊。2007年〈仮面舞踏会〉ウルリカで二期会デビュー。近年では14年二期会〈ドン・カルロ〉エボリ公女、16年同〈イル・トロヴァトーレ〉アズチーナ、17年日生劇場〈ルサルカ〉イエジババなどで絶賛されている。また、コンサートではマーラーやR. シュトラウスなどでソリストとして活躍。来年6月には紀尾井ホールにて初の本格的リサイタルを予定。第6回カルロス・ゴメス国際コンクール第2位入賞。二期会会員。

◇12月17-24日〈第九〉公演



©Sebastian Elsaesser

テノール ドミニク・ヴォルティヒ

Tenor Dominik Wortig

ドイツのノイヴィート・アム・ライン生まれ。デュッセルドルフで教会音楽と声楽を学び、クルト・モルやブリギッテ・ファスベンダーといった大歌手にも師事した。バロックから近現代までをカバーするリリック・テノールとして、オペラ、コンサートの両方で活躍する。これまでにシュトゥットガルト歌劇場やドレスデン国立歌劇場、ミラノ・スカラ座などに出演し、指揮者のブロムシュテット、ホグウッド、ギーレン、ツァグロゼク、ヘンゲルブロック、ヘレヴェッヘらと共演している。独アウグスブルク大学で後進の指導にも当たっている。

◇12月17-24日〈第九〉公演



バス 妻屋秀和

Bass Hidekazu Tsumaya

東京芸術大学卒業、同大学院修了。イタリア留学を経て、1994年から2001年までライプツィヒ歌劇場、02年から11年までワイマール歌劇場の専属歌手として活躍。ライン・ドイツ・オペラ、ベルリン国立歌劇場などにも客演し、深みのある美声と重厚な演技で日本を代表するバスとしての名声を確立した。これまでに出演したオペラ公演は国内外合わせて800回を超える。先月のメシアン〈アッシジの聖フランチェスコ〉では兄弟ベルナルドで好評を博した。第24回ジローオペラ賞、第3回ロシヤ歌曲賞受賞。ライプツィヒ在住。二期会会員。

◇12月17-24日〈第九〉公演

合唱 新国立劇場合唱団

Chorus New National Theatre Chorus

1997年にオープンした新国立劇場で、オペラ公演のための合唱団として活動を開始。現在、メンバーは100名を超え、新国立劇場の多彩な演目によりレパートリーを増やしつつある。高水準の歌唱力と演技力を有し、公演ごとに共演する出演者、指揮者、演出家から高い評価を得ている。読響とは2007年以降、年末の〈第九〉公演をはじめ数多く共演している。特にラヴェル〈ダフニスとクロエ〉、ストラヴィンスキー〈詩篇交響曲〉、メシアン〈アッシジの聖フランチェスコ〉では見事な歌唱を披露し、絶賛を博した。

◇12月12日 定期演奏会
◇12月17-24日〈第九〉公演

合唱指揮 三澤洋史

Chorusmaster Hirofumi Misawa

国立音楽大学声楽科卒業。ベルリン芸術大学指揮科首席卒業。1999～2003年、ドイツのバイロイト音楽祭に祝祭合唱団指導スタッフとして従事。2011年には文化庁在外研修員として、ミラノ・スカラ座に3か月滞在。

2001年より現在まで新国立劇場合唱団指揮者。その業績が評価され、2016年度JASRAC音楽文化賞受賞。

声楽を伴う多くの管弦楽作品に精通する。

◇12月12日 定期演奏会
◇12月17-24日〈第九〉公演

オルガン 大塚直哉

Organ Naoya Otsuka

東京芸大大学院チェンバロ専攻を経て、阿姆斯特ダム音楽院にてチェンバロをB.v. アスペレン、オルガンをJ.v. オールトメルセンのもとで学ぶ。オルガン、チェンバロなどむかしの鍵盤楽器の奏者として活発な活動を行うほか、これらの楽器に初めて触れる人のためのワークショップを各地で行っている。東京芸大准教授、宮崎県立芸術劇場および彩の国さいたま芸術劇場オルガン事業アドバイザー、NHKFM『古楽の楽しみ』案内役。日本オルガニスト協会理事。

◇12月19日〈第九〉特別演奏会

12.12 [火]

船木篤也 (ふなき あつや)・音楽評論

マーラー 交響曲 第3番 ニ短調

作曲：1892～96年／初演：1902年6月9日、クレーフエルト（ドイツ）／演奏時間：約100分

近代の交響曲の基本形は、古典派のヨーゼフ・ハイドン（1732～1809）の創作によって定着をみたとされる。すなわち、四つの楽章からなり、それぞれ第1楽章＝速い、第2楽章＝遅い、第3楽章＝舞曲系（メヌエット、スケルツォなど）、第4楽章＝速いという構成をとる。後期ロマン派のアントン・ブルックナー（1824～96）あたりでも、この線を守っているだろう。

そこへゆくと、グスタフ・マーラー（1860～1911）の交響曲第3番は破天荒というほかない。全部で六つも楽章がある。第1楽章は35分と長大で、これだけで「第1部」をなす。残りの楽章全部が「第2部」。最終楽章はゆっくりゆったりと、こちらも20分以上かかる。楽器編成も大規模で、一部声楽も加わり多彩だ。

なぜこのようなものが現れたのか？

これには、理念の表明という観点からみるのがよい。音楽にあっても、「いかに書くか」という以上に、「何を伝えるか」を重視する行き方が出てきたのだ。「詩的理念」をもとに作曲したフランツ・リスト（1811～86）などから発展したライン。哲学に親しんだマーラー個人の資質というものもあるだろう。

本作の理念は、ズバリ「自然」である。ただし、1896年の、マーラーの次の発言に注意されたい。「いつも奇妙に思うのですが、人は“自然”ということ、たいいてい花や鳥や森の空気のことしか考えません。ディオニュソス神のことを、あの牧神のことを、誰も知らないのです」。古代ギリシアのディオニュソス神を、マーラーは明らかに——哲学者ニーチェにならって——全自然・全生命の根源ととらえているのである。そして第3交響曲の第1楽章

を、作曲の最終段階で「牧神は目覚める／夏が行進してくる（パッコスの行進）」と呼んだ。パッコスは、そう、ディオニュソスの異名である。

この後に続く各楽章に与えられた標題も挙げておけば、「野の花が私に語ること」、「森の生き物たちが私に語ること」、「人間が私に語ること」、「天使たちが私に語ること」、「愛が私に語ること」となる。第6楽章にいう「愛」とは、マーラーによれば、何びとをも見捨てない神の慈愛のことだという。

こうしてみると、この交響曲が、原生命から始まって進化論的に人間にまでたどりつき、ついには至高の神をうたうものであることが分かってくる。

ところがマーラーはこれら標題を、出版の段になって取り下げてしまった。理念たる自然＝宇宙を「描写」した音楽と取られたくなかったのか。彼の音楽は、いわば理念そのものだったのだ。

第1楽章 力強く、決然と 8本のホルンが冒頭で吹く旋律は、当時の自由主義的な若者たちの間でよく知られた学生歌にもとづく。行進曲調も目立ち、そうした社会的「闘争」の身ぶりだが、「自然の目覚め」や「夏の嵐」の音楽と交差するのが特徴。

第2楽章 メヌエットのテンポで、つとめて中庸に、そう、急がずに！ 典雅な踊りメヌエットの部と、急速で諧謔的なスケルツォの部が交代する。

第3楽章 寛いで、スケルツァンド、慌てずに 「カッコーが死んだらナイチンゲールの番さ」という内容の自作の歌曲《夏季交代》を転用。ほかの素材も加わり、鳥の声がしきりと聞こえる。遠方からは郷愁をさそうポストホルン（郵便馬車のラッパ）も。

第4楽章 非常に遅く、神秘的に、一貫してピアノシモで ニーチェ著『ツァラトゥストラはかく語りき』からとられた詩を、アルト独唱が歌う。「だがあらゆる快びは永遠を求める」の旋律は、第1楽章にあったもの。

第5楽章 テンポは愉しげに、表情は悪戯っぽく 民謡集『少年の不思議な角笛』からとられた詩をアルト独唱と児童&女声合唱が歌う。内容は終楽章のテーマ「神の慈愛」につながる。

第6楽章 遅く、静かさを湛えて、感じて 前楽章から間を置かず、慈愛に満ちた弦楽合奏で始まる。二つの主たる音楽素材が変奏されて進行。第1楽章の不穏な回想も。総譜の最後1ページには、「力任せにではなく、たっぷりとした高貴な音で」との指示がある。

楽器編成／フルート4（ピッコロ持替）、オーボエ4（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3（バスクラリネット持替）、エスクラリネット2（クラリネット持替）、ファゴット4（コントラファゴット持替）、ホルン8、トランペット4、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ2、打楽器（グロッケン、タンブリン、トライアングル、小太鼓、鐘、大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、銅鑼、ルーテ）、ハープ2、バンダ（ポストホルン）、弦五部、独唱メゾソプラノ、女声合唱、児童合唱



4. Zarathustras Mitternachtslied

第4楽章 ツアラトウストラの輪唱歌

Friedrich Nietzsche, from „Also sprach Zarathustra“

フリードリヒ・ニーチェ『ツアラトウストラはかく語りき』より

O Mensch!
Gib acht!
Was spricht, die tiefe Mitternacht?
„Ich schlief, ich schlief -,
Aus tiefem Traum bin ich erwacht: -
Die Welt ist tief,
Und tiefer als der Tag gedacht.“

おお人間よ！
よく聞け！
深い真夜中は何を語っているか？
「私は昏々と眠っていた
深い夢から私はいま目覚めた
この世は深い
昼が考えた以上に深い！」

O Mensch!
„Tief,
tief ist ihr Weh -,
Lust - tiefer noch als Herzeleid:
Weh spricht: Vergeh!
Doch alle Lust will Ewigkeit -,
- will tiefe, tiefe Ewigkeit!“

おお人間よ！
「深い 深いのだ！
この世の痛みは深い
快びは——快びは心の奥底の苦しみよりも深い
痛みは言う 消え去れ！ と
だがあらゆる快びは永遠を求める
深い 深い永遠を求める！」

5. Armer Kinder Bettlerlied

第5楽章 哀れな子らのもの乞う唄

Achim von Arnim & Clemens Brentano, from „Des Knaben Wunderhorn“

アヒム・フォン・アルニム & クレメンズ・ブレンターノ『少年の不思議な角笛』より

Chor:
Bimm bamm, bimm, bamm, ...

合唱
びむ ばむ びむ ばむ…

Es sangen drei Engel einen süßen
Gesang,
Mit Freuden es selig in dem Him-
mel klang.
Sie jauchzten fröhlich auch dabei,
Daß Petrus sei von Sünden frei.

あるとき三人の天使が 愛らしい歌をうたって
おりました
いかにも嬉しそうに それは天上で浄らかな響
きをふりまいていました
天使たちは愉しげに 歓びの声をあげて言いました
「ペテロの罪は晴れたよ！」

Und als der Herr Jesus zu Tische saß,
Mit seinen zwölf Jüngern das Abend-
mahl aß,

そう イエスさまが食卓にお着きになり
十二人の弟子たちと最後の晩餐をおとりになっ
ていたときのこと

Da sprach der Herr Jesus: „Was stehst
du denn hier?
Wenn ich dich anseh', so weinst du mir.“

イエスさまはこう言われました「そこでいった
い何をしておる？
私と目があうと泣いたりして！」

Alt:
„Und sollt' ich nicht weinen, du gü-
tiger Gott“

アルト独唱
「泣くでないと仰るのですか ころろ優しい神
さま」

Chor:
Du sollst ja nicht weinen!

合唱
汝、泣くべからず 汝、泣くべからず

Alt:
„Ich hab übertreten die zehen Gebot;
Ich gehe und weine ja bitterlich“

アルト独唱
「おいらはあの十戒を 破ったのでござります
『ペテロは行ってひどく泣く』のでござります」

Chor:
Du sollst ja nicht weinen!

合唱
汝、泣くべからず 汝、泣くべからず

Alt:
„Ach komm und erbarme dich über
mich.“

アルト独唱
「どうかお願いです おいらを憐れんでくださ
いまし！」

Chor:
Bimm bamm, bimm, bamm, ...

合唱
びむ ばむ びむ ばむ…

„Hast du denn übertreten die zehen Gebot,
So fall auf die Knie und bete zu Gott!
Liebe nur Gott in alle Zeit,

「十戒を破ったのなら
ひざまずいてな 神さまに向かって祈れ
いつでも ひたすらに神さまをお慕い申し上げ
ることだ

So wirst du erlangen die himmlische
Freud.“

そうすればおまえも 天上の喜びを手にするこ
とだろう」

Die himmlische Freud, die Selige Stadt;
Die himmlische Freud, die kein Ende
mehr hat.
Die himmlische Freude war Petro bereit
Durch Jesum und allen zur Seligkeit.

天上の喜び それは浄福の都
天上の喜び それは尽きることを知らない
天上の喜び それはペテロにも与えられていた！
清らかな幸あれと イエスさまはそれを 皆に
お与えになったのです

Bimm bamm, bimm, bamm, ...

びむ ばむ びむ ばむ…

(訳：船木篤也)

12.17-12.24

飯尾洋一 (いいお よういち)・音楽ライター

ベートーヴェン

交響曲 第9番 ニ短調 作品125 〈合唱付き〉

作曲：1818年頃～24年／初演：1824年5月7日、ウィーン、ケルントナートーア劇場／演奏時間：約65分

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）は生涯に九つの交響曲を書いた。そのすべてが交響曲の歴史における輝かしい金字塔であり、とりわけ最後の交響曲第9番〈合唱付き〉はオーケストラに加えて、独唱、合唱までを要する異例の大作となった。以来、後世の多くの作曲家たちは9番目の交響曲を作曲する際に、ベートーヴェンを意識せざるをえなかったはずである。9という数字は交響曲の創作史におけるマジックナンバーといってもいい。

もっとも、ベートーヴェンの交響曲が9曲に終わったのは、たまたまというほかない。ほんのわずかでも作曲家の運命が違っていれば、交響曲第8番や交響曲第10番が最後の交響曲であってもおかしくはなかっただろう。ベートーヴェンの57年にわたる生涯のなかで、交響曲の創作期間は決して長くはない。交響曲第1番が完成されたのは1800年。交響曲第8番は1812年。この12年間に8曲の交響曲が集中的

に書かれている。だが1812年の第8番から1824年の〈第九〉までにはさらに12年間のブランクがある。〈第九〉は季節外れの交響曲と呼びたくなるほど作曲時期が異なっており、もはや書かれなかったかもしれない交響曲が、最後に奇跡的に絞り出されたかのような印象すら受ける。

交響曲第8番から5年後となる1817年、ベートーヴェンはロンドンのフェルディナント・リースから手紙を受け取る。手紙にはロンドン・フィルハーモニー協会のために新作交響曲を2曲書いて訪英してほしいと記されていた。ベートーヴェンはこれをいったんは受諾する。このプランが実現していれば、ベートーヴェンはロンドンで交響曲第9番と第10番を披露していたことになる。

しかし、この訪英が実現することはなかった。ベートーヴェンは後に自身の健康状態のため取りやめざるをえなかったと説明している。加えて、この時期、ベートーヴェンは甥カールの間

題に心を碎かなければならなかった。1815年末にベートーヴェンの弟のカスパル・カールが世を去った際、その遺書には9歳の息子カールの共同後見人としてベートーヴェンと母親ヨハンナが指名されていた。甥カールに対して父親としての責任を負うことを望んだベートーヴェンは、ヨハンナはカールの養育者には不適當であると訴え、4年半にわたる法廷闘争に消耗させられることとなった。1818年にはカールの素行不良による退学処分や、出奔して母親のもとに駆け込むといった事件が起き、独身者ベートーヴェンがよもやの「家庭問題」で翻弄されることになる。当時の日記に心情が綴られて

「神よ、私が愛しいカールのためによかれと思ってしたことが、他人を苦しませなければならないこの心の痛みをおわかりでしょう。聖なる御身よ、耳を傾けたまえ。すべての生ける者たちのなかでもっとも不幸なこの私に」

1822年、ロンドン・フィルハーモニー協会からふたたびベートーヴェンに交響曲の作曲依頼が届く。今度こそ9番目の交響曲が書かれることになる。1824年に作品が完成されると、ウィーンの人々からベートーヴェンの新作交響曲をウィーンで初演してほしいと

いう嘆願書が作曲家のもとに届けられた。ベートーヴェンはこれに同意し、ケルントナートーア劇場での初演が決まった。初演では、客席から熱狂的な喝采が寄せられた。

第1楽章 アレグロ・マ・ノン・トロppo、ウン・ポコ・マエストーソ。神秘的なトレモロから主題の断片が垣間見え、やがて頂点で全貌をあらわす。あたかも混沌から秩序が生まれるかのような劇的な幕開け。

第2楽章 モルト・ヴィヴァーチェ。激しく煽り立てるようなスケルツォの間にひなびたトリオがはさまれる。ティンパニの活躍が印象的。

第3楽章 アダージョ・モルト・エ・カンタービレ。天上の音楽を思わせる長大な緩徐楽章。平安と瞑想はやがて金管楽器の強奏による突然の呼びかけで遮られる。

第4楽章 プレスト～アレグロ・アッサイ。轟音とともに開始され、先の三つの楽章が回想された後、「歓喜の歌」の主題があらわれる。バス独唱に誘われて、合唱がシラーの詩による「歓喜に寄す」を高らかに歌う。トルコ風行進曲、トロンボーンを伴った荘重な教会音楽風の合唱、二重フーガなど、次々と多様なスタイルを巡りながら、爆発的な終結部へと向かう。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、トライアングル）、弦五部、独唱（ソプラノ、アルト、テノール、バス）、合唱

第4楽章
An die Freude
「喜びに」

O Freunde, nicht diese Töne!
Sondern laßt uns angenehmere anstimmen, und freudenvollere!

おお 友よ この調べではない！
さらに心地よく 喜びにあふれる歌を とともに歌おう！

Freude, schöner Götterfunken, Tochter aus Elysium,
Wir betreten feuertrunken, Himmlische, dein Heiligtum!
喜び！ 神の閃光^{ひかり} 天国の乙女たち！
私たちは 炎に酔いしれて 天国の汝の聖地に 歩を進める！

Deine Zauber binden wieder, Was die Mode streng geteilt;
Alle Menschen werden Brüder, Wo dein sanfter Flügel weilt.
時の流れに激しく引き裂かれた者も 神の不思議な力によって 再び結びつき
神の柔らかな翼のある場所で すべての人々は 同胞となる

Wem der große Wurf gelungen, Eines Freundes Freund zu sein,
Wer ein holdes Weib errungen, Mische seinen Jubel ein!
ひとりの心の友を持つ 心優しい妻を得る
こうした幸福を得た者は 喜びに唱和せよ！

Ja, wer auch nur eine Seele Sein nennt auf dem Erdenrund!
Und wer's nie gekonnt, der stehle Weinend sich aus diesem Bund!
そうだ、この地上にひとりでも 魂の友を持つ者も とともに歌おう
そして、それが叶わぬ者は 涙とともにこの輪から離れよ

Freude trinken alle Wesen An den Brüsten der Natur;
Alle Guten, alle Bösen Folgen ihrer Rosenspur.
すべての被造物は 自然の乳房から喜びを飲み
善人も 悪人も みな 創造主の薔薇の小路をたどる

Küsse gab sie uns und Reben, Einen Freund, geprüft im Tod;
Wollust ward dem Wurm gegeben, Und der Cherub steht vor Gott.
神は 接吻^{くちづけ}と 葡萄酒と そして 死の試練をくぐった友を 与え給うた
虫にさえも神は快樂を与えた そして天使ケルビムは 神の前に立つ

Froh, wie seine Sonnen fliegen Durch des Himmels prächt'gen Plan,
Laufet, Brüder, eure Bahn, Freudig wie ein Held zum Siegen.
喜びよ 太陽が広い空を 神の定めに従って駆けるように
同胞よ！ 自らの道を喜びをもって進め！ 英雄が勝利に向かって 走るように！

Seid umschlungen Millionen! Diesen Kuß der ganzen Welt!
Brüder! überm Sternenzelt Muß ein lieber Vater wohnen.
抱き合おう！ 幾百万の人々よ！ この接吻を全世界に！
同胞よ！ 星々の彼方に 父なる神は住み給う！

Ihr stürzt nieder, Millionen? Ahnest du den Schöpfer, Welt?
Such' ihn überm Sternenzelt! Über Sternen muß er wohnen.
幾百万よ ひれ伏したか？ 人々よ 創造主を感じるか？
星々の天幕に 神を求めよ！ 星々の彼方に 神は住み給う！

訳：金子哲理

12.19 [火]

J. S. バッハ
コラール〈目覚めよ、と呼ぶ声あり〉 BWV645
〈幻想曲〉ト長調 BWV572

BWV645 作曲：不明／初演：不明／演奏時間：約5分、BWV572 作曲：1708～12年／初演：不明／演奏時間：約9分

コラール〈目覚めよ、と呼ぶ声あり〉
BWV645は、ヨハン・セバスティアン・バッハ（1685～1750）のオルガン作品のなかでもっとも親しまれている曲のひとつ。1747年頃に出版された「シュープラー・コラール集」の冒頭に置かれた作品で、1731年にライプツィヒで初演されたカンタータ第140番第4曲より編曲された。清明な主題が穏やかに奏でられる。

〈幻想曲〉ト長調 BWV572は若き

日に書かれた作品。全体は三つの部分からなり、それぞれにフランス語によるテンポ表記が添えられる。第1部は「トレ・ヴィトマン」（非常に早く）。気ままに飛び跳ねるような、目まぐるしい動きが続く。第2部は「グラヴマン」（荘重に）。重厚な和音が響きわたり、ゆったりとした歩みから力強い高揚感が生み出される。第3部は「ラントマン」（ゆるやかに）。先行する二つの部分を重ね合わせたかのような性格を持った壮麗な終結部。

楽器編成／オルガン独奏